バドミントンの初期の歴史に関する一考察

蘭　　和　真

Ⅰ　バドミントン発祥の定説

日本においては、バドミントンの発祥に関して、１つの定説がある。すなわち、以下の逸話である。

1873 年のある日のこと、英国の貴族ボーフォート公は、そのグロスターシアの領邸バドミントンでホームパーティを催した。ところが、宴半ばにして突然雨が降り出したのである。おまけに激しい風に雷鳴も加わり、人々は屋内に閉じこめられて、しばし雨宿りの形となった。しかし、一向に嵐はおさまらない。飲食にも飽き、話題もようやく尽き、人々は焦燥とやけきれない倦怠ムードに陥った。すると、たまたま参会者の中にインド駐留から休暇帰国中の陸軍士官数名が居あわせ、ボンベイ州プーナ地方で数世紀にわたって行われている「プーナ遊び」の話を持ち出したのである。その説明のため、彼らは身近にあったシャンペンの空びんからコルク（ロ栓）を取り、その片側に鳥の羽根を植えつけ、テニスのラケットを振って、テーブル越しに前後に打ち合って見せた。人々はこの遊びに、たちまち魅了され、退屈を忘れさせる新しいスポーツを発見した。というわけで、その領邸の名をとって「バドミントン」と名づけた。

この話は、1964 年に不昧堂書店から発行された、「バドミントン教本」[1] の中の、「第１章　バドミントンの由来」に記された英文の逸話の和訳である。そして、英文の逸話というのは、1941 年に米国、オクラホマ大学のハロルド・キース（Harold Keith）が編集した「Sports and Games」[2] の中で、紹介されたものである。ちなみに、この「Sports and Games」という書物は、16 種目のスポーツに関する手引き書で、それぞれの種目毎に、簡単な歴史やルールや技術解説がなされている。バドミントンは第１章で紹介されており、キースが当時オクラホマ州のダブルスチャンピオンであったブラッド・シールの手助けを得て著した。

原文は以下のとおりである。

In I873、the Duke of Beaufort gave a house party at Badminton his country estate in Gloucestershire、England. A severe storm forced the guests the guests to remain indoors. Among them were some British Army officers home from India; they fell to discussing poona、a native Indian game centuries old. To illustrate the game、the officers took a champagne cork、stuck one end of it of feathers、and began to bat it back and forth across the table with tennis rackets. Soon all the guests were enthusiastically playing and found the new sport a fascinating means of escaping the boredom of their confinement. That was birth of badminton、which took its name from the duke′s coutry home.

冒頭の定説は、前出「バドミントン教本」の著者が、1980 年にバドミントンマガジン４月号 91 頁「バドミントンあれこれ　連載１」[3] で紹介したものである。

しかし、この逸話については作り話と考える方が自然であろう。なぜこの話が作り話かということであるが、その中に出てくる、「1873 年にボーフォート公爵の邸宅でホームパーティーを開いた」、という話はいいでしょう。きっとそんなこともあったでしょう。「そこにインド駐留から休暇帰国中の陸軍士官数名が居あわせた」、という話もいいでしょう。当時の状況から推測して、そのような場面は十分に想像されることである。しかしながら、インドで行われているプーナゲームを紹介するのにャンパンのコルクを使うという話や重たいテニスラケットを使うという話は、まったく理にかなわない。なぜ、理にかなわないかというと、イギリスには、古くから伝わる、バトルドーアンドシャトルコック（図１参照）というあそびがある。したがって、シャンパンのコルクでシャトルを作る必要もないし、打具はバトルドーを使えばよい。というよりは、陸軍士官たちが紹介したあそびこそが、バトルドーアンドシャトルコックと考えられる。

この話はアメリカ人が紹介したというところが注目されるポイントであろう。イギリス人であれば、バトルドーアンドシャトルコックのことを知らないということは考

えられないので、こんな話は考えつかなかったであろう。したがって、作り話と考える方が自然であろう。

図－１　バドルドーアンドシャトルコック
（The Graphic 誌）May 1871. 発行

Ⅱ　近代スポーツ化する以前のバドミントン

1893 年に英国において世界で初めてのバドミントン協会が設立された。そして、この協会が中心となって、それまで数多く存在していたバドミントンのルールが統一された。いわゆる、アソシエーションルールの誕生である。ここで、この出来事を持って、バドミントン競技も、近代スポーツ化への一歩を踏み出したといえよう。そこで、ここでは、このアソシエーションルールの誕生以前に存在した、いわゆるローカルルールについて、蘭ら[(4)]が 11 件のルール[(5)～(15)]についてその存在と内容を明らかにした 1991 年の報告を、再度、確認することによって、当時のバドミントンの様子を推測したい。

(1) グラウンド、コート、ネット

当時は現行のコートのことを一般的にグラウンドと呼んでいた。また、現行のサービスコートのことを単にコートと呼んでいた。コートの寸法については、一応は図示しているものの、使える土地の広さやプレーヤーの力量によって変えてよいというものが多数みられた。当時はラケットやシャトルのサイズや重量にも規格がなく、そのことがラリーをおもしろくすることをさまたげていたと推測される。その為、当時は、現在のように、例えばコートの寸法にあったシャトルを使うというような発想ではなく、シャトルやラケットや技術にコートを合わせるという試みがなされていたものと思われる。

コートの形状についてもいろいろなバリエーションがあった。それぞれの歴史的な背景については今後の研究が待たれるところである。

ポストやネットに関してはほとんどの場合はっきりと取り決めがなされている。コートの寸法のようにプレーヤーの力量によって変えてよいという記述は１件のルールを除いてはみられなかった。ネットの幅や、材質、支柱の材質にまで言及しているものもあった。また、その設営方法についてはかなり詳しく解説されているものもあり、当時はこのネットの設営が大変な作業であったのではないかと推測された。また、このネットの設営というのが羽根突き遊びとしてのバトルドーアンドシャトルコックとゲームとしてのバドミントンを区別する重要な要素であったと推測される。

(2) シャトル、ラケット

シャトルについてはかなり詳しくその寸法や重量等に言及したり、補修方法や簡単にこわれないようにするための強化方法を紹介しているものもあった。これらの資料から、当時はバトルドーアンドシャトルコック用の色々なバリエーションのシャトルが存在し、それを改良しながらバドミントンゲームに適するシャトルが作られていったのではないかと推測された。

(3) プレーヤーの数

プレーヤーの数に関しては、１対１から４対４まで幅広くできるとしている。もっと多い場合には８対８でもできる。あるいは６対６でもそれ以上でもできるというものもあり、色々なバリエーションがあったようである。

プレーヤーの数に関しては初期の頃には色々な人数でプレーされていたのが用具やコートの寸法等が標準化されるという流れの中でプレーを楽しむのに適当な人数に落ち着いていったのではないかと考えられる。

(4) スコア

ゲームに勝つために必要な得点は、11、15、21、29 と様々なパターンがあった。最も一般的な得点は 15 点で９件の資料が推薦をしていた。1874 年に発表されたローンテニスのルールの原型となった Spairistike でも、勝つために必要な得点は 15 点となっており、互いに影響を与えていたのではないかと推測される。４件の資料は現行と同様の延長戦としてセティングを堆着していた。これはラケッツゲームの方法を取り入れたものであった。また、２件の資料ではローンテニスのルールから延長戦としてデユースを堆薦していた。

スコアに関しても色々なパターンからゲームの継続時間を考慮し試行錯誤を重ねながら現行の方法にまとまっていったのではないかと考えられる。

(5) ゲームの進め方

数件のルールでは得点権のあるサービスという意味でハンドという言葉を用いている。ハンドという語はトラ

ンプゲームにおいて持ち札という意味でも使われる語であるのでトランプゲームからの影響が考えられる。トランプゲームの影響と言えばJ. L. Baldwinの存在がクローズアップされる。BernardAdamsはS. M. masseyが「バドミントンというゲームの名前はボーフオート公爵の邸宅であるバドミントンハウスに因んで名付けられ、その起源はバドミントンハウスで最初にプレーをしたJ. L. Baldwinにある」と記述していることから、このBa l dwinがバドミントンというゲームのルールづくりをバドミントンハウスの中で試みた可能性があるとしている。Bernard　Adamsはその根拠としてBaldwinが当時の雑誌の記事にも取り上げられるくらいに立派なスポーツマンであったことやボーフオート公爵の親友であったこと、さらにはゲームのルールノブくりに長けていた点をあげ説明している。事実、Baldwinは1864年にThe laws of short whistというトランプゲームを考案し書籍にして発表したり、1870年にはBesiqueというゲームのルールを考案し書籍にして発表している。ShortWhistというゲームはトランプゲームであるので当然のことながらその中ではハンドという語が多用されている。ハンドという語についてはこのBaldwinが影響を与えたのかどうかは今のところ明らかではない。しかしながら、興味深い点ではある。もっとも、ローンテニスの初期のルールとして知られるSpairistikeなどにもハンドという語が使われているのでローンテニスの影響を受けた可能性も大きい。

サービスについては、現行のルールと同様に、コート内に設けられたサービスコートの中から対角線に位置する相手サービスコートにラケットでネット越しに打ち入れるというものがほとんどであった。しかしながら、ローンテニスの要領でコートの外側からサービスラインとネットの間に入れるというものもあった。また、サーブは手で投げ入れるというものもあった。ちなみに、サービスを受けるものをバッツマン（Batsman）と呼び、明らかにクリケットの影響を受けている様子が推測された。サービスに関するフオルトについては、ほとんどの場合触れられてはいなかった。しかしながら、サーバーは両足をつけて立たなければいけないと規定していたり、バドルドーは肘の高さより上げてはいけない、アンダーハンドで打たなければいけないと規定しているものもあり、比較的高度な技術がすでにゲームで使われていたことも推測された。

得点法についてはサービスポイント制でゲームを進める方法がほとんどであった。サービス権については現行と同様にサービス権が交替していく方法がほとんどであった。

以上のように、近代スポーツ化する以前のバドミントンのルールには、存在が確認されているルールをみただけでも様々なバリエーションがみられた。唯一共通する点は、ラケットとシャトルコックを使ってネット越しに打ち合うという点のみであった。したがって、この時期のバドミントンは、人々が楽しむことのみを目的として発展し、そのためにもっともふさわしいルールということで、ルール自体も進化していったものと推測される。その結果、1893年に協会が設立され、最小公倍数的人々がもっとも楽しめるルールということで、アソシエーションルールが誕生したものと考えられる。

Ⅲ　「The Graphic」誌掲載の絵から見る 1874年のバドミントンのプレー風景

図2は、1874年4月25日にロンドンで発行された「The Graphic」誌に掲載されたバドミントンのプレー風景である。絵のタイトルには「THE NEW GAME OF BADMINTON IN INDIA」と記されている。この頃、バドミントンがニューゲームとしてインドで盛んにプレーされるようになり、それがイギリス本国に紹介されたものだと思われる。まさにこの頃、バドミントンがイギリスという国において、娯楽のためのゲームとして確固たる地位を築いたことを証明する絵であろう。さて、この絵が掲載された、The Graphicには、同じ号に当時のゲームの様子が詳しく記されている。すなわち、以下のとおりである。

このジ・グラフィックの記事では「THE GAME OF BADMINTON IN INDIA」という見出しで、バドミントンのことを紹介している。それによると、当時のインドでは、バドミントンがクロッケーに代わり盛んに行われるようになってきたとある。また、どこへ行ってもバドミントンのトーナメントや対抗戦のことばかり耳にするとある。さらに、老いも若きもみんなが等しく熱心にこの娯楽に加わっているとある。これらの記述から、当時のインドにおいて、イギリス人が盛んにバドミントンを行っていた様子を伺い知ることができる。

さて、この雑誌に掲載されたルールの概要を以下に示す。

２つのグループそれぞれに地域が割り当てられる。

それぞれの地域はライトコートとレフトコートに分けられる。

サービスラインと呼ばれる境界線によって境界をはっきりさせる。

２本のサービスラインの中間に２本の支柱を立て、その間に幅約18インチのネットか布きれを地面から５

フィートかそれ以上のところに張る。

コートの寸法は様々でプレーヤーの数によって決められる。

バトルドーとシャトルコックが一般に使われるが、風の強い日にはラケットと羊毛製のボールが使われる。

２人でも４人でも６人でも８人でもプレーすることができる。

ショートゲームは15点､ロングゲームは21点まで行う。

どちらのサイドがファーストハンドつまり開始するかが決まったら、ライトコートにいるプレーヤーがサービスラインの後方からネット越しに相手ライトコートにサーブする。

もし、シャトルコックがレフトコートやネットの手前に落ちたり、ネットに当たったり支柱の外側つまり境界の外側を通った場合にはそのプレーヤーはアウトである。

しかし、シャトルコックが相手ライトコートに落ちていった場合には相手はそれを取らなければならない。

もし相手がそれを正しくネット越しに返すことができなかった場合はサーバーサイドが１点を得て、サーバーは場所をパートナーと替り、レフトコートから相手レフトコートへサーブをする。

しかし、もし相手がサービスを正しく返球し、それをサービスサイドが返球し損なった場合にはサーバーはアウトになる。しかしそれを再び返球し、相手がそれを返球し損なったらサービスサイドに１点が与えられる。

絵を見ると、コートの向こうの方で、インド人の召使いがご婦人方にお茶を給仕している様子がわかる。ただし、この絵、本当にインドでのバドミントンの風景だろうか。かなり疑問である。なぜならば、プレーヤーの服装に注目するとよい。暑いインドで、わざわざこの様な服装でバドミントンをやっていただろうか。この絵のプレーヤーの服装については、はなはだ疑問が残るところである。イラストレーターが、誰かに話を聞いて、想像で描いたのだろうか。それとも、意図的にこの様な服装にしたのだろうか。それとも、本当にこの様な服装で、椰子の木の横で､バドミントンをやっていたのだろうか。

図－２　バドミントンのプレー風景
（The Graphic 誌）May 1871. 発行

ともあれ、1874 年に、この様なちゃんとしたコートやルールを用いてバドミントンが行われていたことだけは確かである。

Ⅳ　1873 年に英国のあるスポーツ関係の雑誌に掲載された広告

図３は、1873 年 11 月１日（土）に Sporting Gazette 誌に掲載された広告である。

内容は、バドミントンゲームを宣伝したものである。おそらく、ラケット、シャトル、ネット、ポストなどをセットにして売り出していたものであろう。上の広告では、バドミントンを「ニュー・アウトドア・インディアン・ローン・ゲーム」と紹介している。当時、イギリス人が大英帝国の植民地であったインドでやっていたバドミントンというゲームを、イギリスのローン（芝）の上でやろうと提案している。もちろん、この提案はローンテニスやクロッケーの影響と考えられる。但し書きでは、クロッケーより、心地よくて、健康的で、愉快であると宣伝している。

この広告を出したのは、ジェームス･リリーホワイト、というスポーツ商である。このリリーホワイトという、今でいうところのスポーツショップであるが、今日でも英国で幅広く営業活動を展開している。ロンドンの目抜き通りのピカデリーサーカスにも店を構えている。

ともあれ、1873 年に、この様なバドミントンの広告が英国内で出版された雑誌に出されていたということは、そのときにかなり進化したゲームとしてバドミントンが存在していたことは間違いないと考えられる。

THE NEW OUT-DOOR
INDIAN LAWN GAME
(PRETTIER, HEALTHIER, AND MERRIER THAN CROQUET,)
BADMINTON,
OR
LAWN RACQUETS.
SOLE REGISTERED PROPRIETOR FOR THE BRITISH ISLES,
JAMES LILLYWHITE,
3, QUEEN'S CIRCUS, CHELTENHAM.

図－３　バドミントンの広告
（Sporting gazette 誌）October 1973. 発行

V　1898 年のオフィシャルバドミントンルール

バドミントンのオフィシャルルールが制定されたのは、1893 年のことで、英国ハンプシャー州サウスシーに色々なクラブの代表者が集まり取り決められたと考えられている。このいきさつについては、拙稿「バドミントンの初期の歴史」に詳しいことが書かれている。

ただし、残念なことながら、この 1893 年に決められたルールの内容については、著者の知る限りにおいて、明らかにされてはいない。したがってその内容は藪の中である。

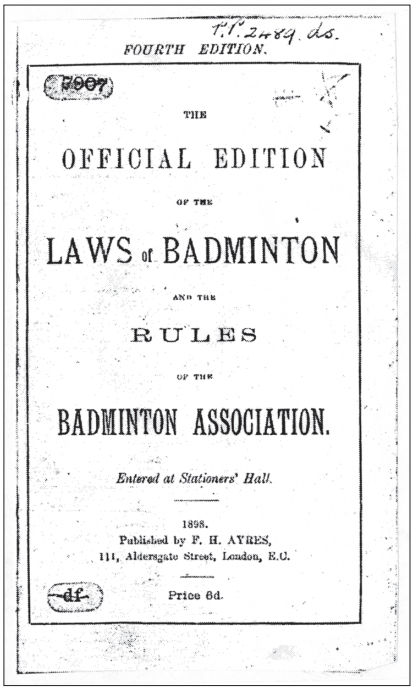
著者が知りうるもっとも古いオフィシャルルールは 1898 年のものである。FOURTH EDITION となっているので第４版ということである（図４）。

ちなみにこのルールブックのタイトルは、The OFFICIAL EDITION of the LAWS of BADMINTON and the RULES of the BADMINTON ASSOCIATION となっており、LAWS と RULES が含まれている。私たちが一般的にルールと呼んでいるものが LAWS で、RULES とは協会の規約のことである。したがって、RULES の方には、第１条に、この協会は The BADMINTON ASSOCIATION と称するとか、第２条にはこの協会の目的は・・・・・・といったようなことが書かれている。

このルールは５条 18 項の条項と付録で構成されているが、おもしろいのはコートの形状である。すなわち、アワーグラス型コートである。アワーグラスとは砂時計のことでまさに砂時計のかたちをしている。 支柱の形状もおもしろいネットの上、６フィートの高さまで鉄製の棒が伸びている。この外側を通ったらフォルトである。きっと審判は苦労したことだろうな。６フィートより上をとんだシャトルの判定は難しかっただろうな。でも、このコート 1901 年４月に開催されたバドミントン協会の定期総会で廃止が決まり、今と同じ形になった。

また、付録の所にであるが、３対３と４対４のゲームについても解説している。この３対３と４対４のゲームについてであるが、理由は明らかではないが、1901 年に改正されたルールでは、付録ではなくて、ちゃんとした条項として取り上げて規定している。第６条を新たに起こし、その中の 19 ～ 21 項で説明しているのである。たぶん根強い人気があったのだろう。この改訂されたルールブックでは、３対３のゲームはシックスハンデッドゲーム、４対４はエイトハンデッドゲームと呼んでいる。このシックスハンデッドゲームとエイトハンデッドゲームをはじめとして、多人数で行うゲームは、1880 年代にはもっともポピュラーなゲームのやり方であったようだ。老若男女が一緒に行えるというところに最大の魅力があったのであろう。ただし、このシックスハンデッドゲームとエイトハンデッドゲームに関する条項は 1906 年のルール改正で完全に削除されてしまった。その理由は明らかではないが、バドミントンが進化していく過程の中で、その役割を終えたということであろう。

他方、第１回～第３回の全英選手権は、この 1898 年のルールの元に行われている。ただし、第１回大会では男女のダブルスとミックスダブルスしか行われていない。男女のシングルスが採用されたのは第２回大会からである。しかし、なぜ、このシックスハンデッドゲームとエイトハンデッドゲームは全英選手権で採用されなかったのであろうか。と考えたとき、授業での風景が思い浮かんだ。著者は、大学の正課授業のバドミントン実習において、これを取り入れ、学生諸君にやってもらっているのであるが、初心者がレクレーション的にやる分には楽しい。しかしながら、上級者がやると危険なスポーツになってしまう。つまり、後衛のプレーヤーが思わずネット前に甘い球をあげてしまったときなのであるが、特に、自軍の前衛が女性であった場合なのであるが、キャーという絶叫が体育館中にこだまする ことになる。このようなバドミントンのプレー風景を、19 世紀の後半には、ヒットアンドスクリームと (Hit and Scream) 呼んでいたようである。


FOURTH EDITION.

THE

OFFICIAL EDITION

OF THE

LAWS of BADMINTON

AND THE

RULES

OF THE

BADMINTON ASSOCIATION.

Entered at Stationers' Hall.

1898.
Published by F. H. AYRES,
111, Aldersgate Street, London, E.C.

Price 6d.

図－４　The OFFICIAL EDITION of the LAWS of BADMINTON and the RULES of the BADMINTON ASSOCIATION

Ⅵ　1901年のオフィシャルバドミントンルール

以下は、当時のバドミントン協会の機関誌であった「LAWN TENNIS and BADMINTON」誌の記述をもとにまとめたものである。

1901年4月12日に、The Badminton Association（バドミントン協会）の定期総会がロンドンにおいて開催された。総会は、協会会長でギルドフォードクラブ所属のバックレー氏が議長を務め、議事の進行を行った。15のクラブから代表が参加をし、残りの10のクラブからは委任状が提出された。この総会では、歴史的なルールの改正が行われた。それは、サウスシークラブ代表のシェークスピア陸軍少将（Major-General G. R. Shakespear）から提案された案を元に行われたものであった。

さて、シェークスピア陸軍少将から出された提案の主な内容は以下のとおりであった。

まずはコートの形状である。上記「Ⅴ　1898年のオフィシャルバドミントンルール」でも述べたが、当時のコートの形は真ん中がくびれた砂時計型であった。非常に煩わしいコートであったために、シェークスピア少将はそれを現行と同様の長方形にしようという提案したのであった。

また、当時は、シングルスもダブルスも同じコートでやっていたのであるが、シングルス用のコートを新設しようと提案した。

さらに、ポストの設置位置についてもサイドライン上ではなくコートの外側に設置しようと提案した。これは、ポストの外側を通って相手コートに入っていくシャトルの通過を防ごうとするためのもであったと思われる。このような配慮をシェークスピア少将がしたのは、アワーグラス型コートではポストの外側を通過するシャトルをフォルトとしているが、その判定が難しくトラブルが頻発した。そこで、コートの外側にポストを設置しネットを張れば、そんなトラブルも起こらないだろうと考えてのことであると思われる。

実は、この提案は、今回の総会の前年、すなわち、1900年4月に行われた定期総会の際にもシェークスピア少将から出された。しかし、そのときは、長方形のコートで試合をやったらどのようなゲームになるのか、想像がつかないという意見が出された。そのような意見が多数を占め、多数決をしたところ、シェークスピア少将の提案は小差で退けられた。しかし、アワーグラス型コートが不便であったことも事実で、1年間、試行期間を設け、色々なことを試してみて、来年、すなわち、1901年の総会で再び議論しようということになった。ちなみにそのときには、シェークスピア少将からではないがロングサービスラインの廃止も提案された。すなわち、ロングサービスラインをバックバウンダリーラインにしようという案である。

1901年の総会において、結局、コートの形状については、多数決の結果、23対2で変更が可決された。みんなが試しにやってみて、長方形の方がやり易かったのであろう。

また、シングルスコートについても新設されることになった。その寸法については、シェークスピア少将の原案を修正しながら現行の大きさに決まった。そのときに、ロングサービスラインについても検討されたが、バックバウンダリーラインをロングサービスラインにしようということになった。

さらに、ポストの設置位置については、シェークスピア少将の提案を元に折衷案が取り入れられた。つまり、新ルールでは、ポストはサイドライン上でも、あるいは、2フィートを超えない範囲であればコートの外側でもよいということになった。これは、狭い建物でプレーをしているクラブに配慮したものであった。つまり、コートの幅は、これまでの砂時計型のコートも新しい長方形型のコートも20フィートであるが、クラブによってはこの幅ぎりぎりの狭い建物でバドミントンをやっているクラブもあるのである。そこで、ポストを設置する位置をコートの外側何フィートという風に決めてしまうと困るクラブもでてくるのである。そこでこの様に幅を持たせたのである。

もちろん、サービス、プレーのいずれの時においても、シャトルがポストの外側を通過したとしてもフォルトではなくなった。

一方、ダブルスのロングサービスラインについては廃止にならなかった。もしこのときに廃止されていたら、ダブルスの戦術も全く違ったものになっていたであろう。現在、ダブルスの基本サービスはショートサービスであるが、廃止になっていれば、基本はロングサービスとなっていたであろう。

Ⅶ　まとめ

本研究では、Ⅰでバドミントン発祥の定説といわれている逸話について、その真偽について検討を行った。こ

れについては、英国には、バドミントンの起源と考えられる「バトルドーアンドシャトルコック」という羽根突き遊びがあったことから、明らかに作り話であろうことが推測された。Ⅱでは、近代スポーツ化する以前のバドミントンについて、著者らが行った既報をもとに再確認を行った。すなわち、1893 年にアソシエーションルールが制定される以前のバドミントンの様子を、ローカルルールをもとに推測した。その結果、この時期のバドミントンは、人々が楽しむことのみを目的として発展し、そのためにもっともふさわしいルールが作成されていくという、まさに、ルールの進化期であることが推測された。Ⅲでは、掲載の絵から見る 1874 年にある雑誌に掲載されたバドミントンのプレー風景をもとに、当時のバドミントンの様子を探った。その結果、1874 年には、すでに、しっかりとしたコートやルールを用いてバドミントンが行われていたことが確認された。Ⅳでは、1873 年に英国のあるスポーツ関係の雑誌に掲載された広告をもとに、当時のバドミントンの状況について探った。その結果、1873 年には、この様なバドミントンの広告が英国内で出版された雑誌に出されていたということから、かなり進化したゲームとしてバドミントンが存在していたことは間違いないと考えられた。ⅤおよびⅥでは、1898 年～ 1901 年のオフィシャルバドミントンルールについて、検討を行うことにより、当時のバドミントンのプレー状況について検討を行った。その結果、1898 年から 1901 年にかけて、バドミントンのオフィシャルルールが激変し、現在のようなルールに落ち着いていったことが明らかとなった。

文献

（1）　栗本義彦, バドミントン教本, 不味堂書店, P. 12, 1964.

（2）　Harold Keith, Sports and games, Thomas Y. Crowell, 1941

（3）　今井先、バドミントンあれこれ、バドミントンマガジン４月号、P. 91、1980.

（4）　蘭和真, 蘭朝子, 初期のバドミントンのローカルルールに関する研究　－1893年のバドミントン協会設立以前に考案されたルールの研究－, 東海女子大学紀要, 第15号, p 15-36.

(5)　The Game of Badminton in lndia、The Graphic、Vol. 6、No. 230、P. 283、1874.

(6)　Henry Jones、Badminton、The Encyclopaedia Britanica、9th ed.、Vol. 3、P、228、1875.

(7)　Cavendish、The Game of Lawn Tennis and Badminton、Thos. De. La Rue、P. 25 － 29、1876.

(8)　著者名なし、Rules for the New Game of Lawn Tennis and Badminton、J. Buchanan、p. 18 － 23、1876.

(9)　著者名なし、Rules and Directions for Playing the Popular games Lawn Tennis and Badminton、Jaques & Son、P. 9 － 13、1876.

(10)　The Earliest Days of Badminton、The Badminton Gazette、fed.、P. 84、1930.

(11)　Julian Marshall、Lawn Tennis and Badminton、Jefferies & CO.、P. 56 － 59、1878.

(12)　著者名なし、Lawn Tennis and Badminton、J. G. Cayless6Sons、P. 27 － 39、1879.

(13)　J. Keith Angus、The Sportsmans Yearbook、Cassel、Petter、Galpin & Co.、P. 193、1800.

(14)　著者名なし、Lawn Tennis and Badminton、発行所不明、P. 27 － 30、1881.

(15)　著者名なし、Lawn Tennis、Badminton、Croquet、Troco、Fives、etc.、etc etc,、Ward、Lock、Sons、P. 30 － 39、1883.